

22. “Tube or not tube” < メタル管をめぐる攻防 >

上記の標題は Radio Draft 誌が GE 対 フィルコのメタル管をめぐる商戦を報じたものですが、申すまでもなくハムレットの “To be or not to be” のモジりで我々外国人には一寸思い付かない中々の出来であると思います。1935 年に RCA / GE がメタル管を発表するや、当時最有力のセットメーカーであったフィルコ社は同年 4 月 8 日付けニューヨークタイムスに 4,500 ドルを投じて全面広告を出し、猛反撃に出ました。

まさに、“To be or not to be” そのものの死活問題だったのです。新製品を売り込む場合と違ってこれが駄目だと決め付ける台詞には相当苦しいものがあったと思います。広告の論旨は次の通りです。先ずフィルコ社の英国支社 Philco Radio & TV Corp. of Great Britain Ltd. が英国でメタル管の前身カトキン管に手を出して失敗した例を挙げ、米国のラジオ工業界もこの轍を踏んではならないと戒めた後、メタル管の不利な点として：

- ・小型化による温度上昇、それに伴う寿命の低下と周囲の部品への影響。
- ・生産性の低さと複合管の実現困難。*(後述)
- ・上記*による球数の増加と必要なスペースとコスト及び消費電力の増大。
- ・透明でないため、ユーザーやサービスマンが目視で確認できず工場出荷検査も不便。
- ・真空密閉箇所が多く、複雑で空気漏洩の危険性大。

と云う筋書きで、従来のガラス管で充分な信頼性が得られると結んでいます。上記*の複合管が出来ないと云うのは納得の行かないところですが、確かに最初に発表されたオリジナル 9 に複合管はありませんでした。

丁度複合管が出始め、もてはやされていた当時の時代背景も考慮して読むべきなのかも知れ



ません。このメタル管の商戦について Radio Craft 誌は 1935 年 7 月号でフィルコ社も早晩メタル管を使わざるを得ないと预言しています。そして現実には果たせるかな自社ブランドの OEM 供給を受けつつメタル管使用のセットを発売せざるを得なかったのは周知の事実です。

一方、メタル管を支持する余りガラス管はメタル管の出現によって永遠の眠りにつくであろうとした風刺画からも当時の激戦の様子を窺い知ることが出来ます。